

---

The Devil is tender-hearted.

美波可奈

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

The Devil is tender-hearted .

### 【Nコード】

N6492E

### 【作者名】

美波可奈

### 【あらすじ】

優しい優しい魔王の話。優しい優しい勇者の話。

## 世界の果てで。 1

殺すことが好きじゃなかった。

憎むことが苦手だった。

出来ればみんな仲良く暮らしたかった。

でも父が。魔族が他の生物を殺しすぎたからもう誰も信じてくれなくなった。

やがて勇者が生まれた。勇者は1000年に一人生まれるらしい。

人間にとっては奇跡のようなものだった。

両腕からは火の玉が飛び出し。

怪我をしてもヒーリングが出来て。

ある種の呪文を唱えると空さえ飛べる。

勇者が生まれてきたのはただ1つ。

私たち魔族を根絶やしにするためだった。

私は勇者が生まれた町の北の外れに人の姿に紛れて暮らしていた。

私は先代魔王の娘だから案外人の姿をとるのは簡単だった。

父ルシファアは先代勇者の封印に閉じ込められずと南のほこらで眠ってる。

私がおのあとを継承したのは15になった年だった。

私が魔王の座に着いたのを気に入らない多くの魔族たちは相変わらず殺戮を繰り返している。

「ピーシア様。」

私には従者がいる。

私が謀反を起こさないよう。

私を見張るため。

「…リク。」

紅い瞳の従者だった。

「ピーシア様。スリーク様がお呼びです。」

リクは優しい声音で。

しかし拒否を許さない強い口調でそう言った。

リクは先代魔王が私を見張るため石に術をかけた最初の魔族だった。

「私は行かない。勝手にしてくれとスリークに伝える。」

私は静かに答えた。

心をざわつかせるのはもう沢山だ。

スリークは銀塊の瞳を持った地竜で。

私の従兄弟にあたる。

私はただひっそりと暮らして。

出来れば短命であつたらと願うだけなのに。

それすら叶わないのか。

## 世界の果てで。 2

「そういうわけには参りません。」

リクはスリークとはそれなりに親しく。

私が謀反を起こさぬよう見張りを強く命じてるのもスリークだった。

しかし私にはそんな事はどうでも良かった。

「そういうわけには参りません。」

リクは私の腕を掴みキツイ眼差しを向けた。

そして私の耳元に口を寄せ。

「勇者の件です。」

そう低い声で言った。

私が睨みあげると掴んでいた腕を放し。

少し声を荒げ。

「近頃勇者が力をつけてきて我々魔族が悉くやられています。」

そう言った。

私は溜息をついて。

「…それで私にどうしろと？魔族を殺すのを止めてくれと勇者に懇願しろとでも言うのか？」

それとも殺しあつて勝利を掴んだ者がこの世の支配者だと？」

「ピーシア様！…！」

「冗談じゃない！…！」

私は声を荒げた。

だって同意は元々出来ないのに。

こんな魔族たちは根絶やしになつてしまえば良いってずっと1番願ってるのは私なのに。

どうして？

どうして殺しあわなきゃいけない？

殺し合ったって其処に生まれるものは恐怖と絶望と……。  
負の感情だけじゃないか。

「どうせスリークは私が行っても行かなくても自分がしたいように  
しかないだろう？」

行くだけ無駄だと思うが？」

多分激昂に近かったと思う。

其処まで一気に言うと思が切れた。

あまりに悔しくて。

自分が出来る事が何も無くて。

手を拱いてるしかない自分が情けなくて。

激昂した私に努めてリクは冷静にこう言った。

「ピーシア様。ピーシア様は現魔王様であるのです。」

我々を統べて頂かなくてはならないのです。それを……。」

「それを何だ？では私が殺戮強奪をするなと命じればそれに従うの  
か？」

「……それは。」

これ以上リクに何を言っても堂々巡りだと感じた私は本棚から本を  
取り出し視線を外した。

不愉快だった。何も出来ない自分が。

そんな私をリクは見つめて冷静に告げた。

「……スリーク様はピーシア様が来られなければ大規模な災害を起こ  
すと仰っていました。」

「……………」

私は無視することに決めていたが。

防げる事も防げなければ所詮魔族だとスリークに笑われるだろう。

それは本望じゃない。

「リク。着替えを持って来い。」  
私は気を引き締めた。

### 世界の果てで。 3

私は自分の代で魔の血を絶やそうとずっと思っていた。  
憎むことが苦手で争うことが苦手で。

だけれども私は魔族なんだと痛感する事がよくあるんだ。

リクの他に3人従者がいたが。

リクの他の3人は私の怒鳴り声で消滅してしまった。

それは如何に私の気が強いかという証でもあり。

そういえばスリークがその時銀灰の瞳を細めて。

こう言ったのを覚えてる。

「ピーシアは流石魔王だけあって血は争えない。」と。

先代魔王も気に食わない従者は悉く消し去ったと私をあざ笑った。

私は悔しかった。

言葉だけで存在を消し去る事が出来るこの力が憎かった。

きっと本気になればこの世界は破滅する。

私の代で魔族を根絶やしにするとすると私と先代魔王の父と。

そしてスリークが勇者の聖剣によって切られなければならない。

今巷で好き勝手にやってる魔族は父が造った者だから父が消滅すれば自然と消える。

あとは魔族を作り出す力を持つてる私とスリークが聖剣で殺されれば良いんだ。

「ピーシア様。持ってまいりました。これにお着替えください。」  
リクが持ってきた黒装束は私が魔族だと再確認出来るような物だった。



金の腕輪。ネックレス。イヤリング。そして真紅の髪を編みティアラをつけて。

黒いドレスを着て人間の術を解けば。

其処には恐ろしい形相の魔王が現れる。

何処からどう見ても魔族以外には見えない自分の姿を見て。

…ショックだった。

判っていたはずなのに心の何処かで人間に近しい姿をとってれば。その内人間みたいになれそうな気がしてたんだ。

醜い醜い私の姿。

後ろからリクの声がして。

「ピーシア様。よくお似合いですよ。」

私はリクを一瞥して。

窓の外に向かって口笛を吹いた。

## F e l i c i t y 1

それは飛竜を呼ぶ合図。

私のたった一つの大事な飛竜。

まるで私みたいな境遇の飛竜だった。

他の飛竜より羽が短く。

他の飛竜より小さいけれど。

だけど懸命に私の言う事を聞く。

その姿は何とも愛らしく私に心があるのなら。

「愛しかった。」

その表現が1番合うだろう。

私の飛竜は随分前の話になるがスリークの所へ向かう途中に。

怪我をしてるのを見つけたんだ。

その時もスリークは私を甘いと一括した。

苦々しい表情で。

勿論私は魔王だから飛竜の力を借りなくても空は飛べる。

瞬間移動だって出来る。

だけど私はその飛竜が私みたいな境遇で可哀想でたまらなかった。

何故か自分と被って見えたんだ。

理不尽な境遇に生まれ。

理不尽な環境に慣れなくちゃならなくて。

だから私は名前を付けて懸命に傷の手当てを施した。

それからその飛竜は私の側近になった。

「フェリシテイ。」

私が名前を呼ぶと嘶く。

私が唯一心を許せる飛竜。  
その意味で付けた。

フェリシティは背に私を乗せ懸命に羽ばたく。  
行き先はいつも通り。

スリーク城。

たかが飛竜によく名前なんぞ付けたものだ。  
スリークにも笑われた。

でも私はただ飛竜とは呼びたくなかった。

大好きな飛竜に大好きな唯一の名前を付けただけだった。

フェリシティ。

私はその姿を見るだけで救われる。

こんな感情持つてなければこんなにきつと苦しくないだろうに。

私にもし心があるのなら。

フェリシティには伝わってるかな。

そう思いたい。

## F e l i c i t y 2

「ピーシア様。その黒装束はよくお似合いですよ。」

それまで黙って後ろを飛んでいたリクが口を開いた。

「リク。それは皮肉か？」

私は振り向きもせず片頬を上げた。

リクはいつもいっともずっとそうだった。

私が争いごとを好まず憎むことも苦手な事を全て承知のくせに勿論庇ってくれる事もない。

あるのは冷たい視線と声だけだった。

私が争いごとを好まなくなったのは父の謀略をずっと見てきた所為だと思う。

何もしていない人間の財産を奪い命を喰らい。

そうして魔族は生きていくのだと私に教えた所為だと思う。

父にとって人間の断末魔の叫びはそれはそれは美しいメロディに聞こえたらしいが。

私にとっては不快な不協和音でしかなかったから。

それでも私は父を憎むことは出来なかった。

憎んでしまうと般若みたいになっちゃってしまうから。

憎しみが体を支配してしまうと僅かな心だけれど。

その心さえ見失ってしまいそうだから。

人間というモラルとか道徳観念とか。

だから私が心を失ってしまう前に。

どうか勇者が現れて。

どうかその聖剣で私を刺し殺して欲しい。

本当にそう思う。

フェリシティは不穏な空気をリクと私の間に感じて嘶いた。

「大丈夫だ。フェリシティ。」

私の唯一の分身みたいな。

フェリシティ。

唯一の私を裏切らない相手。

南の最果ての山を越えるとそこには不気味なぐらい大きいお城が見える。

私はフェリシティの手綱を握り締めた。

## 地竜スリークとの契約 1

「ピーシア。」

南の最果てで待っていたスリークは人の姿をとっていた。  
銀灰の瞳を持った好青年に見える。

あの姿で若い女に近づき一瞬の隙について命を喰らうんだ。

「スリーク。私を脅すとはいい度胸だ。」

私はフェリシテイから降りてその背を撫ぜながら。

「全くその姿で人間を欺くんだもんな。」

そう続けた。

元々スリークは私のフェリシテイを快く思っていなかった。

「…まだその飛竜に情けをかけてるのか？」

スリークは脅しともとれるような声音で私に言った。

「フェリシテイ。行け。」

私はフェリシテイを大空に飛び立たせてから。  
振り向いて言った。

「用件は？」

「勇者の件だ。」

「それが？」

どうしたと促すと。

スリークは声を荒げ。

「…もうすぐ勇者が聖剣を手に入れる。本気にならないと先代のように封印されるか殺されるぞ。」

私は可笑しくて可笑しくて。  
そんな願ったり事無いのに。

勿論私限定での話だが。

不憫だとか憐れみとかそんな感情が沸々と湧いてきて。

「何が可笑しい？ピーシア。」

スリークが声を荒げるたび可笑しかった。

「生き延びるためにご苦労な事だな。スリーク。」

私たち魔族が好き勝手にやるからその報いが人間から跳ね返って  
きてるだけだろうが？」

「それとも。」

私は続ける。

「それともそんな私たちに生き延びる価値があるとでも本気で思っ  
てるのか？」

日頃思ってること。

感じてること。

それらを一言では言い表せないけれど。

「どうしてピーシアは!!」

スリークは頭を抱え。

「どうしてそうなんだ？魔王のくせに魔王らしくなくて。」

スリークが思わず言った言葉は私の胸に突き刺さった。

感情があふれ出す。

「はっ!!冗談だろ？私の何処が魔王らしくないって?」

「こんな人間何処にもいないぞ。恐ろしくて。」

醜い醜い私の姿。

その姿を見るたび私は痛感する。

人間にはなれないんだと。

## 地竜スリークとの契約 2

スリークはいつも通り蔑んだ眼差しを私に向け。

「行いの事を言ってる。」

そう続けた。

「ピーシア。お前は魔王のくせに魂を喰らいもせず。カスミだけ食って生き永らえてる。どうしてだ？」

「それでもスリーク。」

私はちゃんと瞳を逸らさず答えた。

「私はちゃんと力は持つてる。カスミだけ食っても力は衰えはしない。」

何せ魔王だから。」

そう魔王だから。

こんな体衰弱して死んでしまえばいいのに。

それすら許されなくて。

「地竜のお前より遥かに強いぞ？」

そう付け加えるとスリークは黙り込んだ。

だって聖剣には魔の気を持つものは近づけない。

その聖なる気で消滅してしまうから。

スリークはそのことを重々承知してる。

だから打つ手が無く私を呼びつけて対策を練ろうとしたのだ。

私は魔王だから。

本気になればこんな世界ぶっ潰せる力がある。

そして悪の限りを尽くして。

魔族の楽園とするのも悪くないと。



どうしてそう思えないんだろう？

人間たちは浅ましくてずるくて。

生きてる価値なんか無いって思えるような奴ばかりだけど。

私は羨ましかった。

一生懸命生きてるその姿がいつも眩しかった。

悪い奴は必ず滅びるって。

私はそんな勇者が現れる事を強く願っていた。

そうして私を殺して欲しい。

こんな偽善的な魔王要らないって笑って殺して？

魔族はよく涙は流せないからって言うけど。

私は涙を流してみたい。

ああ。これでよかったと言う涙を。

### 地竜スリークとの契約 3

私とスリークはある契約を結んだ。

それは私の命と引き換えに勇者に手を出さないということ。全て私に委ねるという事。

スリークは初めは拒んだものの意外とすんなり受け入れた。それは。

魔王が本気にならなければとても勇者には敵わないと重々承知だから。

たかが地竜の分際で私や勇者に楯突けるわけが無かった。

私のアジトへフェリシティとリクとで向かう道々で。

リクがあんまりしつこくスリークとの話は何だったかと訊いてくるから。

私は一言。

「契約を結んだだけだ。」

そう言った。

「……まさかご自分の命を??」

リクは私を見つめ。

「……悪いかな?元々長すぎる命なんだ。」

私だって少しぐらいは良い事したいじゃないか?」

私は臆面も無く言う。

「これはある種の賭けだ。私とスリークと。先代魔王がどれぐらい長く生き永えるのかのな。」

リクは私を射抜くように見つめた。

「それでも私たちは復活できます。」  
「…聖剣に刺されなければな。」

私は片頬を上げ。  
ニヤリと笑った。  
目の前のリクが。  
うろたえているから。

本当に馬鹿だよ。魔族って。  
私を初め本当に大馬鹿者が揃ったもんだ。  
「知ってるか？リク。」

私たち魔族は魔の血がある限り復活は容易く出来るが人間たちは  
どうだ？

復活が出来ないから一瞬一瞬を一生懸命生きている。

お前たちが襲った人間の周りの人間たちは。  
お前たちが襲った人間の事を思って遠くで涙を流すんだ。」  
判らないだろう？と続ける。

「私はいつかそういう涙を流す人間がいなくなること心から願っている。」

魔王だけど。」

人間が涙を流す。

私には不協和音でしかなかった断末魔の叫び。  
遠くでその人間を待っている人間たち。

それらを先代魔王は好んでいた。  
魂を喰らう時のあの恐ろしい表情が忘れられない。  
思い出すだけで吐き気がする。

「リク。礼を言うぞ。  
スリークとの契約に咬んでくれて。」

リクは横からスリークにこう言っていた。

「ピーシア様の言う事をお聞きになったほうが賢明ですよ。」

きっとあの口添えが無ければ。

あるいはこんなにあの猜疑心の強いスリークを落とすのは不可能だったかもしれないから。

リクは私に飛びかかった。

## 星はまだ掴めない 1

フェリシティが異変に気づいて嘶いた。  
悲しそうな声で私を呼ぶ。

私は敢えて抵抗しなかった。  
だって私はこんな命すぐにでもくれてやるって思ってる。  
だけど。

だけどスリークと契約した以上ここでもし死ねば新たな魔王を生ませられて。

混沌の時代を築いていくのが見えるような気がしたから。

せめて私だけでも人間の味方をしたかった。

リクは私の首から手を放し。

「どうしてですか？」

「どうしてピーシア様はそんなに生き急ぐのですか？」  
そう呟いた。

「だって私は半分人間だろ？」

それは魔族の皆が禁句にしてきた言葉。

私は知ってる。

だから他より理性があるんだ。

魔の血は私の大部分を占めるけど。

血は紫だけど。

だけど私は血が紫な事を知って結構嬉しかったんだ。

人間の女を私の父は孕ませて。

私は生まれた。

人間と魔族のハーフだから。

血は赤と青で紫。

力は魔族寄りで理性は人間寄り。

「どうして私だけ血が紫なのかいつだって聴きたかった。」  
だけど。

だけど殺戮を繰り返す父を見て。

父に殺される人間たちの血を見て。

私は判った気がした。

1人ぐらい人間の味方の魔王がいたって良いじゃない？  
そう思った。

何処まで私の理性が持つかは本当に判らないけれど。  
でも本当に本当に。

私は勇者が現れて。

その勇者に殺される事だけを願う。

こんな世の中救われる価値があるか甚だ疑問だけど。

だけど魔族よりきつと人間の方がいくらかはマシなはずだから。

リクは何も言わなかった。

ただ驚きの表情だけ瞳に映した。

## 星はまだ掴めない 2

「とにかく私は何もやるつもりは無いからな!!」

私はあの時スリークを睨んで言ったんだ。

「ピーシアッ!!」

私が踵を返そうとするとスリークは低い声で言った。

「俺は本気だぞ。」

物凄く恐ろしい声で。

「お前が動かないんなら大災害を起こしてやる。

俺には容易い事だ。…何たって地竜だからな。」

私が振り向かないからスリークは焦れて。

尚声を荒げた。

「ピーシア。お前は争いごとが嫌いだと言いながら人間を見捨てるんだな。」

私は。

私は振り返らず静かに答えた。

「それならばスリーク。この件を私に一任できるか？

2度と口を挟まないと誓えるか？」

それは私の命を賭けたって惜しくない絶対条件だったんだ。

ここまでスリークを黙らす事が出来るなんて想像だにしなかった。

大体スリークと言う地竜は人の言う事をバカにして聞かない。

まあそれが魔族というものだが。

今回は本当に私の力を必要とするほどに困ってる証拠だった。

いつもならこちらの条件など絶対に聞きもしないのに。

「…それは。」

スリークは口を濁す。

「私は魔王だ。今回の件を私に一任すると誓え。

誓えないのならお前の好きなようにするが良い。」

スリークは自分にとって何が損で何が得かを考えていたのだろう。それは私にさえ手に取るように判った。

そしてリクが口添えをしたお陰で私はスリークから契約書を取ってくる事が出来た。

だから。

だから目の前のリクは自分がまんまと私の術に嵌った事が。そしてスリークを知らないながら嵌めた事が。

どうにもこうにも遣る瀬無かったんだと思う。

魔族の約束は契約書を交わすことで成立するから。

破れば死しないから。

だからリクは口を利かなくなった。



### 星はまだ掴めない 3

フェリシティはいつも村はずれの私のアジトに着くと。  
裏に置いてある聖水を飲んで裏山へと帰っていく。

聖水は私たち魔族には毒でしかないが。

フェリシティには丁度良い薬みたいなもので。

疲れからの回復が早い。

人間界に暮らす私たちの家には本当は必要の無いものだったが。

フェリシティが私と仲良くなってからは。

聖水の樽を置く事にした。

それもスリークに正気の沙汰とは思えないとバカにされた。

しかしフェリシティのお陰で人間界では1つの家に1つの聖水の樽  
は必ず置いてあるので怪しまれなくて済むとスリークに言ったら。  
スリークも渋々納得していた。

私が1番困る事は人間に怪しまれる事だから。

フェリシティを見送ってから。

私は人間の術を唱えた。

日暮れも近く多分このままの姿でいたとしても。

今日ぐらいは大丈夫だろうと思っていたが。

リクが無言で人間の術を唱えたので。

私もそれに倣い術を唱えた。

元々獵師が住んでたらしいこの家は。

大きな暖炉があり獲物を吊るす大きな針みたいなのが天井からぶら  
下がっていて。

獵銃は3丁壁にかけてあった。

元々私がここを棲家にしようと思った理由もそれだった。

女が銃を持つのは当たり前みたいな世の中だから。

リクはいつもの通り暖炉の前に座り無言で鋭利な刃物を研ぎ始めた。私もそれに倣いパッチワークをし始めた。

私はパッチワークで作った飾りを。

リクは鋭利な刃物を売って生計を立ててるように見せかけていた。そうすれば怪しまれずに済む。

その時玄関のドアの方からノックの音がしたんだ。

## 勇者クーラン 1

トントントン……

それは控えめに。

聞こえるか聞こえないかぐらいの音で。

私は訪問客などいるわけ無いのに何故か期待した。

例えば勇者とか。

私を見つけて私を殺しに来たとかって。

リクは全神経を扉の外へ集中させ私を見た。

私は氣を探ってみたがただの人間の氣にしか感じなかったから。

「どちら様ですか？」

まるで人間みたいに。

扉の外へと声をかけてみた。

「ああ。すいません。」

若い男の聲が聞こえた。

「暗くなっちゃって町まで帰れなくて。一晩でいいので泊めて頂けませんか？」

氣づけば外は土砂降りで。

私は慌てて扉を開けてやった。

リクが口を挟む前に。

「どうぞ？」

扉を開けると背中に劍を背負ったずぶ濡れの青年が立っていた。

青年は私に素敵な笑顔を向け。

「すみません。暗くなる前に町へ帰ろうと思っていたのに道を外れ

てしまったみたいで。

拳げ句雨が土砂降りになってきてこのザマで。

ほんとに僕って運が悪い。」

そう言ってから。

青年は続けた。

「でも僕は運が悪かったけど運は良かったのかも。

だって泊めてくれる家が見つかったから。神さまに感謝しなくちや。」

青年はずぶ濡れ過ぎたから私は急いでタオルを渡した。

そして濡れた髪を拭きながら「クーラン」と名乗った。

そして鋭い視線を向けていたリクへ案外人懐っこい笑顔を向け話し始めた。

だから私も油断していた。

まさかこの青年が勇者だったなんて思わなかったから。

そしてリクがその青年が持ってた聖剣に触るだなんて。

「リクッ！！！！」

私が名前を呼んだか呼ばないかのうちにリクは元通り石に戻った。

先代魔王がかけた呪文が解けたんだ。

「ピーシアさん……。これは一体？」

クーランは私が教えたばかりの名前を呼んだ。

## 勇者クーラン 2

遅かれ早かれ人間界に住んでいるという事は魔族だとばれる日も近いと。

心の何処かでいつも思ってた。

だけど出来ればこのまま平穩無事に過ごしたいとも思っていた。

だからどうやって姿を眩まそうかそればかり考えていた。

だって私は勇者にだけ正体を教えるつもりでいたから。

下手に動いて大騒ぎになるのは望まないから。

この醜い姿を晒して。

人間たちが束になってかかって来て。

争いごとになるのを私は望まないから。

だから私は重要な事に気づかなかった。

何でリクがただか剣に触っただけで石に戻ってしまったのかを。

「…ピーシアさん。」

心地良い声でクーランが私の名を呼ぶ。

「勇者が聖剣を手にして魔王を求め旅をしている事をご存知ですか？」

そう問われ。

私は不思議と偽ろうとは思わなかった。

「ああ。知ってる。」

偽ってもどうしようもないってホントは何処かで気づいてたのかも。「俺がその勇者です。名前聞いたこと無かったですか？」

ああ。終わったって思った。

殺されるのがこんなに嬉しいって思わなかったから。長かった。

あなたを待ち望み。

あなたが来るまで私は耐えたよ。  
カスミを食べて生き永らえるこの体から解放して欲しいと強く願った。

でも私はここで死ぬわけに行かないと端と気づいた。

私が死ぬのは他を根絶やしにしてからだ。

私がいかにここで殺されたならスリークの天下になってしまう。  
きつともう取り返しがつかなくなってしまう。

このまま偽らず魔王だと名乗り。

聖剣に殺されるか否か。

それかこの勇者に命運をかけてみるか否か。

勇者クーラン。

きっと魔族の中では有名な名前だったはずなのに。

私は聞いたことが無かった。

きつとそいつという話題を避けてきたから。

蒼い蒼い海のような瞳でまたクーランが口を開いた。

### 勇者クーラン 3

「ピーシアさん。あなたは何者ですか？  
魔道師？魔族？錬金術師？」

その中に不思議とあなたが魔王ですねという言葉はなかった。  
あれだけ醜態を晒して。

一思いに殺されたらどれだけ楽になるだろうって。

私はここで刺されたとしても敢えて強気に出してみた。  
それは無謀な賭け。

「私をあなたと共に連れて行ってくれたら私の正体も判りますよ。」  
無謀にも私は勇者にお供にしてくれと志願したんだ。

クーランは瞳を大きく見開き。

深い深い海のような瞳に私は吸い込まれそんな錯覚を起こし。  
ここで刺されても本望だと覚悟を決めた。

私がここで刺されればスリークが動き出すだろう。

私がかここで生き残ればスリークは勇者に手出しは

出来ない。

私は祈るような気持ちで勇者を見つめ。

言葉を紡いだ。

「…ただ言える事は私をここで殺しても根本的な解決にはならない  
から。」

私は聖剣が振り下ろされるだろう事を思い。

瞳を閉じた。

結局私は何も出来なかった。

ただ少しでも勇者の寿命を延ばしただけで。

「この聖剣って案外重いんですよ。」

勇者はそう言って私に語りかけた。

「例えばあなたをここで殺したら。他の魔族はどうなります?」

「…今よりもっと暴れだすだろうと思う。」

「例えばここであなたを生かして俺と共に旅をしたらどうなります?」

「…判らない。」

そう判らない。

ただ判ってる事は私は勇者の役に立ちたいと心から願ってるだけ。

「判らないけど私はあなたの役に立ちたいと思ってる。」

信用なんて元々持ち合わせてないけど。

「あなたは預言者ですか?」

クーランは聖剣構え私に向ける。

目映い光が差す。

「いいや。私は単なる魔族だ。殺される事も覚悟の上だ。

ただ今死んだら未練が残るだろうなと思う。」

「…未練?」

私は言葉を紡いで自嘲の笑みを零す。

何て魔王らしくないんだろう。

「救えるものを救えなかったという未練だけが残るだろうって思う。」

言ってから本当に笑いが込み上げた。

バカな私。

バカな魔族。

そして。

きつと犠牲にこれからもなるであろう人間たちを私は哀れに思った。





## 瞳を閉じて 1

きつと私は人間の術を解いたら理性は無くなるだろうと思う。  
それが私の忌み嫌う「魔の血」というもので。

いくら私が争い事嫌いだといっても。

いくら私が人間との混血だといっても。

理性が無くなる。

近くに人間がいれば尚更だった。

「…斬らないのか？」

クーランは刃を私に向けたまま。

しきりに何かを考えてるようだった。

そして。

聖剣を1回振って元の鞘に納めた。

私にとってはその光景はまるで。

まるで見たことも無いような意味不明な行動に見える。

もう1度訊いた。

「…斬らないのか??」

するとクーランはニツと笑顔を向け。

まるで楽しい事が起こったかのようにこう言った。

「斬るのはいつでもできるから。俺勇者だし。

あなたなんか力で負けないから様子を見ることにします。」

瞬間張り詰めていた緊張の糸がふっと解けたような気がした。  
そして。

クーランはリクがよく座って刀を研いでいた椅子に座り。

大きな伸びをしてこう言った。

「ああ。今日は色んな事があって疲れちゃったな。」  
そう言って瞳を瞑った。

何て警戒心の無い勇者らしくない勇者なんだろう。  
私が寝首を書くかも知れないって思わないのだろうか？  
海のように深い蒼い瞳を閉じてその内深い呼吸に変わった。

私は1人取り残されたような気になって。

私が明日売りに行こうと思って造ったパッチワークのケットを奥から持って来て。

クーランへ静かに掛ける。

薄暗いランプの灯はずっと灯っている。

魔族は眠らないからベッドも上掛けもなく。

さっきのケットだって散々リクに嫌味を言われながら造ったものだった。

私が魔王らしくないから。

でもそれ以上に勇者らしくない勇者クーランは一体どういう風に今まで生きてきたのだろう？

クーランが守ってるはずの人間たちに批判を受けながら。

魔族討伐の旅を続ける。

たった一人で。

私は思いを馳せてみた。

静寂の中初めて瞳を閉じてみた。

## 瞳を閉じて 2

暗い暗い闇の中で。

誰かが私に剣を振り下ろす。

嫌だ。助けて。死にたくないよ。  
だれかつ!!

「…シアさん。ピーシアさん。」

気づくとクーランの腕の中で。

安心して眠るという行為をしたらしい。

段々とハッキリしてくる意識の中で。

まどろむ私にクーランはとびきりの笑顔を向けた。

「おはようございます。」

挨拶すらまともにした事の無い私に。

クーランはそう言った。

…私にもし心というものがあるのなら。

胸の辺りがこっ温かくなった。

温かくなって。温かくなって。温かくなって。

本当に初めて挨拶というものを返したんだ。

「…おはよう。」

そう言った私をクーランはギュッと抱きしめた。

自分にこんな平安が訪れることがあるなんて。

思ってもみなかった。

「…苦しい。」

私はもつと抱きしめて欲しかったけど。

人の腕がこんなに居心地が良いなんて思わなかったけど。

魔の血が騒ぎ出す前に離れなくちゃ。

そう思ったから。

「ああ。ごめんなさい。ピーシアさん抱き心地最高だから思わず力込めちゃった。」

クーランはそう言っ腕を放した。

胸が高鳴る。

早鐘のように鼓動が早くなる。

今まで経験した事の無いような鼓動の高鳴り。

私より勇者は一回り手が長かった。

私より数十センチ背が高かった。

心地良い声が好きだった。

私はその空気をどうしていいか判らず。

窓の所へ行き窓を開けた。

気持ち良い風が髪を攪る。

「今日も良い天気だな。」

私は振り向き勇者を見た。

## 聖水 1

窓の外には絶景が広がる。

思えばそれが大好きでここをアジトに選んだんだ。

幸い誰も住んでなかったみたいで。

リクが誰か住んでたら俺が殺しますと息巻いていたのを思い出す。

私が直接手を下す事が臆病で出来ないから。

リクは瞳を輝かせピーシア様は俺が人間を殺すところをよく見ていて下さいと言った。

人間の断末魔の叫びと言ったら最高の調べだから。

だけどアジトには誰も住んでなかったから。

私は胸を撫で下ろした。

綺麗な景色が見える此処を人間から奪いたくなかったから。

そして綺麗な景色を見ると何だか私は許されたような気がして。

魔族じゃないような気がして。

人間になれたような気がして。

…それは逃げでしかないけれど。

深呼吸をする。

気づくと勇者の長い腕が私の後ろから回り。

私は勇者に囲われた格好になっていた。

「此処の眺めは絶景ですね。」

不思議なもので勇者が居る日常が当たり前のような気がして。

私は振り向いて。

「…うん。綺麗だろう？」

そう得意げに言った。

私が初めて間近で見た人間が勇者というのも驚きだが。  
その勇者のとなりで安心しきってる自分にも驚きだった。  
もっと魔の血が騒ぐんだと思ってたから。

クーランは手にリクだった石を持っていた。

「いずれこれについても教えてくださいね？」

俺、気長に待ってますから。」

「…すまない。」

「良いですよ。俺が俺の責任であなを生かしてるんだから。  
危険だったらすぐに斬ります。」

その瞳は真剣だった。

私は低い声にならない声でまた呟く。

すまないと。

そしてせめてもの救いを求めて言葉を紡いだ。

## 聖水 2

「…聖水飲むか？」

顔1つ分高いところにあるクーランを見上げ。

私がそう言うくとクーランは驚きの表情を浮かべた。

「…あるんですか？」

「…裏にある。好きなだけ持って来て良い。」

言葉少なにそう言うくとクーランは私の後ろからどいて。

「ありがとうございます。貰ってきます。」

そう言った。

こんなにも胸が痛い。

クーランが触れた腕が温かい。

…こんなにも私は人間になりたかっただなんて。

…こんなにもあの勇者に心を突き動かされ。

…こんなにも愛しいと思うだなんて。

あの笑顔が私の凍てついた心を溶かしていく。

一生魔王だということを隠しながら。

いつか現れる勇者の聖剣に刺される事を願いながら。

カスミを食べ短命である事を夢見ながら。

ずっとここでひっそりとリクと暮らしていくんだと思ってた。

それこそ何千年何万年ときっと生きるんだろうと思ってた。

こんなにも愛しい勇者が現れるなんて。

こんなにもクーランを好きになってしまっただなんて。

どうせならもっと憎める勇者だったら良かったのに。

ごめん。愛してしまった。

勇者にははた迷惑な話で。



魔王になんか愛されたくないだろうけど。  
あなたを愛してしまった。

もう優しくできない。

私は鬼のようにならないと無理だ。

そっけない態度で私は消えよう。

最後にあなたに聖剣で刺される時は醜い姿を晒して。

私は覚悟を決めた。

この思いは封印して2度と見せないように。

安心してあなたの腕の中で眠るような醜態はもう晒さないから。

だからせめて心の奥だけで愛してても良い？

もう2度と見せないから。

あなたに殺されるのは本望だと思ってるから。

## 旅の始まり 1

ピーピーピー……

窓から口笛を吹きフェリシティを呼ぶ。

フェリシティは懸命に羽ばたきながら現れた。

私は外に出てフェリシティの背中を撫でる。

伝わる鼓動は生きている証。

伝わる体温は温かった。

拾った時からずっと愛しかった。

その円らな瞳が。

その短い羽根が。

自分の中に愛しいと思う感情があったことも。

フェリシティには色々な事を教わった。

決して諦めない事。

決して卑屈にならないこと。

決して裏切らない事も。

だから私はフェリシティだけは裏切れないと思ったんだ。

「…それは飛竜ですか？」

背後にクーランが立っていた。

「…ああ。ずっと前に怪我をしてるのを保護したんだ。  
仲間には散々バカにされたけどな。」

クーランは寄って来てフェリシティの背を撫でた。

フェリシティは瞳を細め喜んだ。

「名前は何て言うんですか？」

至極当然のようにクーランは尋ねてきた。

私は皮肉気に頬を歪め。

「…フェリシティと付けた。」  
そう伝えた。

クーランの肩が震えた。

私はクーランが私のことを笑いたいんだろうと思い。  
付け加えた。

「魔族が名前を付けるだなんて可笑しいって笑って良いぞ？  
おまけに幸運って言う意味の名前を付けたって笑って良い…。」

私はクーランに抱きしめられた。

幸運って意味のフェリシティって単語は私がピーシアじゃなかった  
らの名前。

人間だった母の名前だった。

「可笑しい訳がないでしょう？」

クーランが私を抱きしめたまま言う。

「あなたが付けたのは幸運って名前でこの子に相應しい。

ピーシアさんはその辺の人間よりずっと人間らしいって。」

声を荒げて言葉を紡ぐ。

私なんかのために。

胸が痛かった。

張り裂けそうだった。

あなたは どうして 私なんか に 救いの言葉を かけて くれるの？

私は足元から崩れそうだよ。

今まで やつと 立っていたのに 魔王だつて 事忘れそうだよ。

私は礼の言葉も言えず口から出た言葉は。

「離せ。」

だった。

想いが溢れる。

クーランはびっくりして私を離し罰が悪そうに私を見た。

「そんな事より聖水は取れたか？」

私はその空気に耐え切れずクーランに問う。

クーランは嬉しそうに壺を見せて。

「ハイ。こんなに沢山取れましたよ。」

屈託の無い笑顔で。

私は吸い込まれそうになった。

## 旅の始まり 2

私はフェリシティの背をまた撫でて言った。

「悪いが聖水を少しフェリシティにやってくれないか？」

私が聖水に触れないから。済まないが。」

勇者にそう伝えると勇者はフェリシティに寄って言って。

「お前のご主人優しいなあ。」

そう呟き飛竜に聖水をやってくれた。

フェリシティが飲み終わった後私はフェリシティに跨って。

勇者を振り向き付いて来いと顎を杓った。

「ピーシアさん。何処へ？」

クーランは相変わらずのんびりした声で。

私を見上げた。

「良いから来いって。」

私が声を荒げるとクーランは情けなさそうに言った。

「…だって俺空飛べないんですけど？」

「…えっ？」

一瞬言われた意味がわからなかった。

「いや。だから俺飛べないんですって。」

「……ええええ……？？？」

「…そんなに驚くだなんて酷いなあ。」

クーランは私を見上げ。

情けなさそうに呟く。

だって勇者って魔法が使えて。

誰より強いから魔族討伐に出て。

私が思わずそう言つと。

「それは一般論。俺の場合は向いてないから多分他の勇者より魔法使いこなせてないって。」

ちよつと気分を害したようにクーランは言う。

私は可笑しかった。

笑えてきた。

誰より愛しい勇者クーランを今までよりもっと好きになったから。

「じゃあ乗れ。連れてつてやる。」

私は手を差し出した。

するとクーランは子供のように瞳を輝かせ。

「飛竜に1回乗ってみたかったんだ。」

そう言つた。

手を掴み引き寄せる。

私は若干の緊張をしながら。

クーランを後ろに乗せた。

フェリシティは嘶いて。

大空へと羽ばたく。

前代未聞の勇者と魔王が手を組んだ旅の始まりだった。

## 先代勇者の結界 1

目的の場所に着くまで私はクーランと色んな話をした。  
クーランはツートンの町の外れの生まれだという事。

聖剣は町のど真ん中の噴水に突き刺さっていて。

其処には先代勇者の銅像があり。

石版には文字が刻まれてた。

「この剣を抜けた者が次代勇者だ。」と。

面白半分に剣に触ったらするつと抜けたんだという事も。

しかしそれからが大変で。

怒涛の如く魔族が襲ってきたからクーランの家族は地底で暮らして  
いて。

クーランの帰りを待つてるということも。

いつか平和な世の中に戻る事を待ち望みながら。

クーランは愛しい家族を置いて旅を続ける。

だから簡単には死ねないと蒼い瞳でクーランは誓う。

優男で担いでる剣は重そうで。

でも人を引き寄せる蒼い蒼い海のような深い色の瞳を持っていて。

その声は心地よくて。

背は私より高いけど。

そんな過酷な運命を背負ってるだなんて微塵も見せず。

勇者になんかなくなってしまったお陰でなんて愚痴りもせず。

静かに微笑む事が出来るのは何故？

それが勇者故なのか？

「…着いたぞ。」

私は背後のクーランにそう伝える。

眼前に南のほこらが見えてきた。

南のほこらには私もスリークも他の魔族は勿論好き好んでは近づかない。

むしろ近づけないんだ。

南のほこらには先代勇者の聖なる結界が張り巡らされてるから近づけない。

魔の気が高ければ高いほど神聖な気を嫌うから。

そのほこらの1番奥で私の父先代魔王のルシファーが眠っている。

「…此処は…魔王が眠ってるという…」

クーランはそう呟いた。

フェリシティを急降下させほこらの近くへ降り立つ。

フェリシティは静かに着陸した。

私は気を高め神聖な気に犯されないように最大限注意した。

クーランは結界に恐る恐る寄って行つて。

言葉を紡いだ。

「…先代勇者の結界ですね。」



## 先代勇者の結界 2

「いいか。よく聞くんた。」

私はクーランへ声をかける。

「魔王は長い爪と牙を持つてる化け物だ。

人間でいう急所といわれる所を狙うんだ。

まずは頸動脈と言われる首と。

人間が自殺する時によく使う手首と。

そして大腿部といわれる足だ。」

私がそう説明するとクーランは眉根を寄せ。

気分が悪いと口を覆った。

「そして最後に心臓に止めを刺す。判るな？」

私が平然とそう言うくとクーランはフニヤツとした声を上げ。

「ピーシアさん…。その顔でそんな事言わないで。」

そう言った。

バカらしいと私は声を上げる。

「クーラン！！真剣に聞くんた。」

判りましたよ。とクーラン。

「聖剣で止めを刺したらどうなるんです？」

「…大半の魔族は消えるはずだ。」

私はそう答えた。

そう消えるはず。

だって大半は先代魔王が作り出した魔族だから。

「因みに質問していいですか？」

クーランが私を見つめそう言った。

私が促すと。

「因みにこれは先代魔王ですよね？」

念を押すように私に尋ねる。

「そうだ。」

頷くとやっぱりとクーランは呟いた。

「ピーシアさんは来れないんでしょう？」

私が説明をする前にクーランが言った。

私は神聖な気には触れないし息も苦しいと言おうと思ってたら、先を越された。

クーランの言葉の中にはあなた魔族だしね。というのも入っていたように思う。

「首と足と手首と心臓。でしょ？」

クーランはほこらの中へ口笛を吹きながら入って行った。

まるで楽しい事をするみたいに。

私はその後姿を見つめながら。

祈った。

どうかあの勇者が生きて還ってきますように。と。

## 癒しの魔法と飛竜 1

多分私の魔力は父が死ねば半分以下になるだろうと予測がつく。

元々魔族には性別なんて高度なものは持ち合わせてないのだが私は生まれた時から女だった。

それは私が魔族と人間のハーフだから。

当時は性別のある次代魔王だと随分騒がれたが。

しかしそんな私は明るみになることを望まなかったから。

先代魔王の父と従兄弟の地竜スリークが人間界では絶大な力を轟かせていたんだ。

元々私の魔力は強い方ではないから魔王継承と共に潜在能力も引き出されて。

以前とは比べ物にならないくらい強くなった。

昔の私はスリークにですら負けそうだったと苦笑いを浮かべた。

その時フェリシティが嘶いた。

キューーーーーーン。

「どうした？」

私はフェリシティに寄って行つて。

撫でようとしたらガクンと力が抜けた。

それはきつと先代魔王が死んだ証。

フェリシティは心配そうに私に寄り添う。

私はフェリシティの鞍を掴み耐えた。

そういえばこの鞍も私が編んでフェリシティによく似合う真紅だった。

これもリクは気に入らなかったっけ？

痛いわけじゃない。  
でも変な感じだった。

暫く入り口が見える遠い所で私はフェリシティに支えられながらク  
ーランを待った。  
足音が聞こえる。

其処に立ってたのは血だらけの勇者だった。

「大丈夫か？」

私がそう問うとクーランは血を拭いながら。

「これ俺の血じゃなくて魔王の血だから。」  
そう言って笑う。

青い青い血は間違いなく先代魔王の私の父の血だった。

聖剣は相変わらずクーランの背で鈍く光りを放ち。  
クーランは癒しの魔法を唱えた。

綺麗な七色の光がクーランの足元から現れて。  
頭のとっぺんにまでその光が通過する。

私はその光が神聖すぎて近づけなかった。  
癒しの魔法を唱える勇者クーランはとても綺麗だった。

「…綺麗な魔法だな。」

私は思わず呟いた。

これが勇者なんだと何だか感動してしまったんだ。

## 癒しの魔法と飛竜 2

「魔王の奴反撃が強かったですよ。」

血を拭いながらクーランが言う。

凍てつく吹雪を吐くのが得意だった父は。

クーランに致命的ではないが凍傷を負わせた。

私も小さいころ近づいただけで凍てつく吹雪を喰らい半殺しの目に遭った覚えがある。

元々魔族は誰かを守るとか犠牲になるだとか。

そんな殊勝な感情は持ち合わせていないから。

私が半殺しの目に遭った時冷たい視線を向け父はこう言った。

「お前はそれでも次代魔王か。」と。

自分の血を濃く受け継いだ跡継ぎなのか？と。

一時期は従兄弟のスリークが次代魔王候補だと言われてた。

私は別にそれで構わなかったのに。

その時スリークが言ったんだ。

自分に任せることは容易いがピーシアを野放しにしたらいつ人間の味方をし出すか判らないと。

私を苦しめるためスリークは私に魔王継承を迫った。

そして事ある毎に私を呼びつけ襲ってきた。

その度私は強くなっていく。

スリークと魔の血を遺したくなかったし。

滅亡を誰より願ってる私がスリークに孕まされるわけにはいかなかったから。

初めは死に物狂いに抵抗してやっと死守した操だったけど。  
魔王継承をしてからは滅多やたらにスリークも私を襲えないぐらい  
強くなった。

物欲性欲食欲全てを私は我慢した。

でもそれでも今では胸を張って勇者に言える感謝してる。  
魔王だけど。

人一倍私は我慢強いと思う。

そして私は今となっては私が魔王で良かったとすら思うんだ。

それは勇者クーランあなたに会えて。

あなたを守る契約が出来たから。

生きてる意味すらわからなかった私は。

カスミを食って生き永らえて。

絶望の淵に居たけれど。

全部あなたに会ったためだったんだね。

「…大丈夫か？」

私はクーランに尋ねて。

クーランが呟いた。

「でも現世の魔王って一体誰なんだろう??」

## 約束 1

現世魔王はどんなに強いんだろう？

それはクーランにしては当然の疑問だったし。

名が轟いていたスリークと私の父に隠れて。

私は育ったから。

でも私はあえてそれを無視した。

だって答えられないから。

まだ真実を明かす訳にいかないから。

「ピーシアさん??どうしたんです。その瞳の色…。」

そして私を見たクーランは驚きの表情を映した。

私が人間の姿をとつてるときは薄い茶色の瞳をしてるはずだが。

クーランの驚きようからして人間の術が解けてきたんだなと思った。

「魔力が弱まってきたんだろう?そのうちもっと驚くと思う。」

私は消え入りそうな声で呟いた。

そして気を引き締め言った。

もう時間がないと。

早くスリークの所へ行かないとと。

私の理性があるうちにスリークを倒したい。

そして死ねればこんな幸せな事ないと思うから。

クーランはそういう私を見つめ。

言っただ。

「ねえ。ピーシアさん。この旅が終わったら俺にご褒美くれません

か？」

えっ？と振り向く間にクーランは私の手を握り。  
ホントに目の前に立った。

鼓動が高鳴る。

心が痛い。

愛しい勇者。

「…何を…」

私がやっと上げた声はおかしいくらい震えてた。  
お願い。これ以上かき乱さないで。

私あなたの胸に飛び込みたいくらいあなたのことが好きみたい。

「手を離せ！！」

懸命に突っぱねてもあなたの方が強かった。

クーランは強引に私を引っ張って。

抱きしめた。

心臓が壊れる。

心が痛い。

耳元で優しくクーランが囁いた。

「ピーシアさん。俺にこの旅が終わりを無事に迎えたらご褒美下さい。  
い。」

一緒に来て欲しい所があるんだ。  
「判ったから離せ！！」

私が力一杯抵抗して離れると。

約束ですよ？とクーランが言った。

私は乱れた呼吸を整えて座り込んだ。



本当は知ってた。

そんな日はいくら望んでも来るわけではないことも。  
旅が終わるということは私が死んだ事を意味する事も。

でも言えなかった。

望みは叶わないから望みっていうことも。

## 約束 2

そして私たちはスリーク城を目指した。

あの後すぐに私はクーランに声をかけフェリシティに乗り込んだ。

クーランは私の様子に驚き。

でも只ならぬ雰囲気を感じたらしく大人しく私の腰に手を回しフェリシティに乗った。

「急がないと手遅れになる。」

私はそう繰り返し呟いた。

望みが望みで終わる前に。

だって折角こんなにも夢中になれる勇者が現れて。

私は大好きなのに。

また繰り返すのは嫌だった。

魔族をなんとしても根絶やしにしたかった。

クーランはそんな私を見て。

「ピーシアさん。そんな急がなくても。」

そう労わってくれたのに。

私はそう考えられなかった。

「あなたは甘すぎる!!」

思わず。

思わず口をついて出てしまった言葉は余りにクーランを傷つけ。私をも傷つけて。

背後から伝わってくるクーランの気は怒っていた。

何にも言わないけど。

あなたの情けで生きてる私なのにね。

スリーク城に着くと。

私はクーランが降りるのを見計らって。

フェリシティから真紅の鞍を外した。

手綱もそして名前を彫った飾りも。

そしてギュッとフェリシティを抱きしめる。

体温を手に残したかった。

今まで有難うと。

円らな瞳のフェリシティに口付けて。

私は別れを誓う。

いつか平和な世の中で再会出来たらいいね。  
そんな日來ない事も判ってるけど。

「お前はもう自由だ。」

私は一言そう言った。

フェリシティの円らな瞳が大好きだった。

小さな羽根で飛ぶ姿に勇気を貰った。

そして約束の合図を送る。

「いけっ!!」

フェリシティは大空へ舞い上がった。

今まで本当に有難うと。

## 終焉

あなたは常に優しくかった。

涙が出るぐらい。

愛しくて愛しくて。

でも私の決意は揺るがない。

あなたと出会えて私は幸せだったよ。

私の手のひらには幸せはないけど。

あなたには輝かしい未来がある。

あなたは此処では死なないから。

「スリーク！！居るんだろう？」

私は大声を張り上げた。

クーランは私を見つめていた。

物陰からずっと視線を感じていて。

私は内心ひやひやしていた。

もしかしたらフェリシティも犠牲になるかもしれないと。

でもそんなことしたら私はきつと鬼のようになる。

般若みたいな形相で怒り狂うと思う。

「ピーシア！！よくもよくも裏切ったな！！」

裏切り。

欺瞞。

腹の探り合い。

魔族の専売特許で。

食うか食われるかの世界に生きていて。

「良いか！！よく聞くんだった！！」

私はクーランにむけて言葉を発する。

「私が攻撃を仕掛けるからあなたはその聖剣で私ごとスリークに止めを刺すんだ！！」

その言葉と共に私はスリークに飛び掛った。

人間の術は解け。

露になったのは恐ろしい魔王の姿。

クーランは立ち尽くして。

「でも！！」

クーランは甘いから私の姿を見て。  
疑心から確信へと変わった。

「魔王ピーシア！！！！」

「そうだ！！」

紫色の血を流し。

私はスリークに噛み付く。

スリークも必死な形相で私に楯突いた。

瞬間鈍色の光があたりを包み込み。

私は終わった事を悟った。

それでこそ勇者だ。クーラン。

私が愛した勇者クーラン。

さあ。心臓を一突きで。

その聖剣で。

私を終わらせて。

「ピーシアさん…。」

最後に聞いたのはあなたの声。

最後に涙を流したのは私？

最後に…私に口付けたのはあなた？

毎年毎年雨季に入るこの季節に祭りがある。

紫色の石を飾り。

人間は各々祈る。

どうか優しい心を宿らせてください。あなたのように。と。

## 終焉（後書き）

ピアシア編終わりです。  
クーラン編に続きます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6492e/>

---

The Devil is tender-hearted.

2010年10月10日05時53分発行